

山伏さんときつね

山々がすっかりと赤や黄色に染まる頃のことです。

峠を越えようと、山伏さんが峠道を歩いておりました。

しばらく行くと、崖っぷちの岩の上で、きつねが気持ち良さそうに昼寝をしておりました。

「おやおや、きつねのやつめ、のんびりと昼寝なんぞしておるわい。ちょっとからかってやるとするか」

山伏さんは、そうっとしのび足で近寄り、「ワッ！」と、きつねを驚かせました。

いきなりのことに、きつねはびっくりして飛び起きましたが、

岩から崖下へと、すーんと落ちて、どこかへ逃げて行ってしまいました。

「ああ、面白かったわい。」

山伏さんは、また峠道を登っていきました。

しばらく歩いていると、日が暮れかかってきました。

「まだ、昼を過ぎて間もないのに、えらく日暮れが早いもう」

「あれあれ、これは急がんと、日が暮れてしまう。逃げ、逃げ」

山伏さんは早足で急ぎましたが、とうとう日はとっぴりと暮れてしまいました。

「こりゃあ、困ったもう」

星の明かりを頼りに薄暗い峠道を登っていくと、人家の明かりが見えてきました。

「助かった。あの家に一晚泊めてもらうとするか」

なんとかその家に泊めてもらうことができました。

ところが、布団に入ってうつらうつらしていると

白いものをかぶった何かが部屋のすみの方から現れました。

そして、山伏さんが寝ている所に近づいてきます。

「なんじゃ、これは？」

白いものは、ゆっくり近づいてきます。

「こ、こ、これは化けものか、こりゃいかん、逃げなくては！」

慌てた山伏さんは体ごと障子戸にぶつかっていきました。

すーん・・・なんと、山伏さんの身体は宙を舞い、落ちていきました。

山伏さんはなぜか崖下に落ちてしまいました。

そして、夜ではなくまだ昼間でした。

「まったく、どうなっておるのだ、ん？これは、もしや・・・」

「ああ～、面白かった」

そんなきつねの声が、どこからともなく聞こえてきたそうなの。